酔つて候

酔って候

司馬遼太郎

文藝春秋

酔って候　奥付

著　者　司馬遼太郎（しばりょうたろう）
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三

昭和四〇年三月一五日一刷
昭和四四年六月一日三刷

四三〇円

印刷　大日本印刷
製函　加藤製函
製本　中島製本

© 1965 RYOTARO SHIBA　PRINTED IN JAPAN

目次

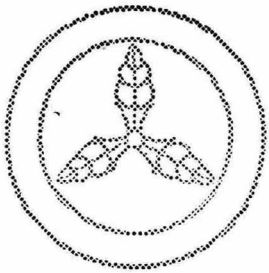
酔って候　五
きつね馬　一三三
伊達の黒船　一九七
肥前の妖怪　二四三
あとがき　三〇〇

裝幀　神野八左衛門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

酔って候

酔
っ
て
候



一

高知城下では、

「南屋敷」

と通称されている。屋敷の南裏に潮江川がながれ、北にお城がみえる。

邸内に、樟の老樹がある。潮江川の水あかに映えるせいか、ひどく樹相がいい。若者はこの樟がすきで、この樹のために詩を十編もつくってやった。

抱いてもやる。

毎日、体をすりつけるようにしてのぼるのである。べつに樹のぼりが趣味なのではなく、樹にでものぼっていないと、堪えられないくらしなのである。

若者の樹のぼりは、屋敷の家来たちが吹聴するのか、城下でも有名だった。

「まるで樟が情人でもあるように、咆えながら武者ぶりつきなさる」

と、ひとはいった。

事実、そうだった。遠くから咆えながら駈けてきて樹に抱きつき、足をまげ、手をあげて、ざっ、ざっ、とのぼってゆく。尻からげして、後ろに一本、居合刀をさしている。

馬で駈けてきて樹にとびつくときもある。

かと思うと、酒好きのこの若者は、瓢を一つ腰にぶらさげて、しずしずと樹に登ってゆき、樹上で酒をのむことがある。酒はらくらくと二升は飲めた。というより、馬術、居合、詩作をしている以外は、いつも酔っていた、といったほうがいい。

「若様はよほどあの樟がお好きとみえまするな」

と、この南屋敷のお長屋に先々代から住みこんでいる廃人のような老用人が、やや軽侮するようにからかったことがある。

「あたりまえだ」

若者は、仇を見るような目で、老人を見た。

「この樟のほか、おれの相手になるような者がいるか」

若者は、自分のまわりにいるたれをもが気に食わないらしい。

「はてはて」

老用人が、口をゆがめた。

「あの樟めが人のようにものを申しまするので」

「言わぬが、思慮ぶかそうな顔をしている。そういうことのわからぬ人間は、ただ立ってあるくけものにすぎぬ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「これはお手きびしい。若様は詩人におわしまするからな」
「祖父江」
若者は、老川人をよんだ。
「殿と申さぬか。すでに若様ではない」
二年前に、家督を継いでいる。城下では南御屋敷様、とよんだ。南様、ともいう。東様や西様というのもある。いずれも藩主の一門連枝で、分家であった。
若様は、山内家十代豊策の五男を家祖とする分家の家にうまれ、生涯を無役ですごす。そう約束づけられている。
(飼いごろしだな)
そう思うことがある。その飼い料として藩庫から蔵米千五百石が支給される。知行ではないから、領地も領民もなく、役につくことがないから、藩に対してなんの発言権もない。自然、家中でも、こういう御連枝は貴族として崇られても、人として畏れられることはない。
(おもしろい稼業だ)
と、われながら思うことがある。生きていることだけが、一生の仕事なのである。
若者は、体技にむく体をもっていた。五尺六寸で、腰に弾機がついているように敏捷だった。剣は無外流の手島市平に学び、馬術は源家古流、居合は長谷川流の谷村亀之丞の指導をうけている。とくに馬と居合に練達し、谷村亀之丞などは、
「殿は、居合でめしが食えまするな」

とまで言っていた。
若者は、樟の下枝までのぼる。そこからとびおり、おりながらキラリと抜き、目にもとまらぬすばやさで鞘におさめ、トンと地面に立つ。そんな芸もできた。
生母は河むこうの石立村の郷士の娘で、父豊著の側室である。追手門筋の父の隠居所に住んでいて、めったにこの屋敷に来ないが、あるとき濡縁からこの若者の物狂おしい居合芸を見て、
「若様はなぜそのようなことをなされます」
と、いった。
「身の内に、火のようなものがあります。じっとしていると、悶え狂いそうになります」
と、若者はいった。火のようなものを消すには体を激しく動かすか、詩をつくるか、酒をのむ以外に手がなかった。女も欲しくはあったが、気に入った侍女がない。この屋敷の女奉公人といえば、そろいもそろって醜女で、この若者には手をつける気もしなかった。
その点、異常であった。醜女をみると、肌が戦慄し、その者のたてた茶も気味がわるくて飲めない、というところがある。自然、夫人をまだ迎えていなかった。好みがむずかしくて、一門連枝、家老級の家の年頃の娘について下ばなしめいた話が出ても、
「あの家の娘の顔は、塩が吹いておる」
とか、
「おれは蔦がきらいだ。なぜなら、蔦の中にはとかげが棲む。あの娘はとかげに似ている」
などといっていた。話が煮えない前に立ち消えになってしまう。

ことし、二十二歳である。

嘉永元年九月、その日、潮江川の対岸の筆山の落葉樹がようやく色づきはじめたので、若者は例の樟の樹上に登り、酒を飲み、筆紙を用意して詩想を練っていた。

樹上から、塀むこうの路上がみえる。平素は閑寂としたこの屋敷町がひどく物さわがしく、路上を裃をつけた武士などがあわただしく往き来している。

「なにごとか」

と樹上から老用人にたずねたが、老用人はさあ何でございましょう、と関心を示さなかったため、（まさかいくさが始まるわけでもあるまい）と思い、酒をのみつづけていた。

夕暮れになったが、騒ぎはやまない。

なにしろ世捨人同然の連枝の屋敷だから、何事があった、と藩から急を報らせる者もなく、近所の武家屋敷の者も、いかに近所とはいえ、身分のかけはなれたこの屋敷に事情を教えにきてくれるわけでもない。

江戸から城へ早駕籠がついたのである。

若者はなにも知らずに夕食を終え、夜、それも夜更けに、もはや寝ようと思っているやさきに、門前に人語がした。

家老の深尾相模が蒼くなって訪ねてきたのである。別室に招じ入れると、

「お人ばらいねがわしゅうございまする」

と、落ちつきのない眼でいった。若者がそのとおりにすると、

「江戸で殿が急死あそばされました」
と、深尾がいった。
「聞いている、しかし先々月のことだ」
と、若者は驚かなかった。去々月、藩主豊熈が三十四の若さで病死した。豊熈には子がなかったため、養子届を出してあった実弟の豊惇二十五歳がすぐ相続し、幕府も許可し、その襲封の御礼のためについこの間、国許を出て江戸へむかったばかりである。
「いや、その豊惇公がお亡くなりあそばしたのでございます」
これには、若者も驚いた。人というものはそうも短時間のあいだにころころと死ぬものだろうか。
「しかし、御逝去のことは、公儀にも家中にもいっさい内密でございます」
深尾は、ふるえていた。むりもない。襲封早々で急死した新藩主には子がなかった。嗣子もなく、養嗣子も届け出ていない場合は、改易、よくて国替え、減封である。徳川初期以来、この制法で消滅した家はかぞえきれない。
「もしこれが公儀に漏れれば、土佐二十四万石山内家は、廃絶でございまする」
となれば、筆頭家老深尾相模も禄をうしなって浪人の身となる。むろん、この若者も流浪の身にならざるをえない。
「されば、殿様は御遺骸こそ江戸鍛冶橋御屋敷の庭内にお埋め申しましたが、表むきはいまだおなくなりあそばさず、御病中とし、手ばやく江戸御留守居の者が御養子を公儀へ相届けました。——その御養子とは」

と、深尾は食い入るように若者を見て、

「あなた様でござりまする。すぐ江戸表へ御出立ありまするように」

若者は茫然とした。

血縁のうすい自分に、ありうべきことではなかった。急死した藩主には歴とした実弟がいるのだ。ただその実弟は惜しくもこの春に支藩麻布家へ養子にゆくことがきまってしまっている。もうひとり弟がいる。これはまだ三歳の幼児であった。

「おれがか」

若者は、うめいた。信じられぬことであった。藩主一門の日蔭者の分際が、一躍、土佐侍従、大広間詰、二十四万石の大守になるのである。

「相模、なってやろう」

と、自分でもおどろくほどの大きな声を出してしまった。

深尾相模はその声にへきえきし、ちょっと若者を小馬鹿にしたような顔で、「城内で家老たちが待っておりますので」といってそそくさと辞し去った。

そのあとわざと不機嫌な顔をした。若者は座敷をはねまわりたいほどの衝動をおさえ、まさかいまの深尾相模め、あれは筆山のきつねではあるまいか、とおもったりした。

詩を作りたい、と思った。

しかし筆をとってみると、頭に無数の星が熱っぽく飛んでいるようで、詩想がすこしもまとまらず、一語のことばもうかばなかった。やむなく、文章をかいた。

璋（若者のあざな）、もと布衣韋帯（無官の平民）、性読書を好まず、山水に放浪し、飲酒に日を消す。豈はからんや、弱冠誤って王臣の員に備わり、もって南州の大守に薦められる。

とまで書き、ちょっと筆をとめ、（だからこのさきどうすべきだ）ということを考え、やがて、

「読書」

と、山陽ばりの書体で書いた。もともと、書物を読むよりも、詩文を書くほうがすきであった。谷村亀之丞は「武術でめしが食える」といってくれたが、若者はそんな褒辞はすこしもうれしくなかった。詩文家といってほしい。十代のころもし山内家の分家などにうまれなかったならば、と何度思ったかしれない。京か江戸に出て詩壇の雄となり、山陽以上の文名をはせる自分を夢想しつづけてきた。が、いまは一国の大守である。詩人の情熱をもって一国を統御し、筆をもつかわりに鞭をあげて天下の風雲を叱咤できるかもしれない、と思った。

二

若者は、名を兵庫助とあらため、十一月二十六日高知城下を発ち、翌月二十一日に江戸に入り、五日後に幕府から相続をゆるされた。

この間、若者は知らなかったが、幕閣に裏面工作している七人の江戸家老の苦心は非常なものであったらしい。病臥中の（実は病死している）豊惇の夫人智鏡院が薩摩藩主島津斉彬の実妹であるところから斉彬に殿中工作をたのみ、斉彬は伊予宇和島侯伊達宗城、さらに筑前黒田藩主黒田斉溥などにも援助をえて、時の老中阿部正弘を説き、正弘が、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com